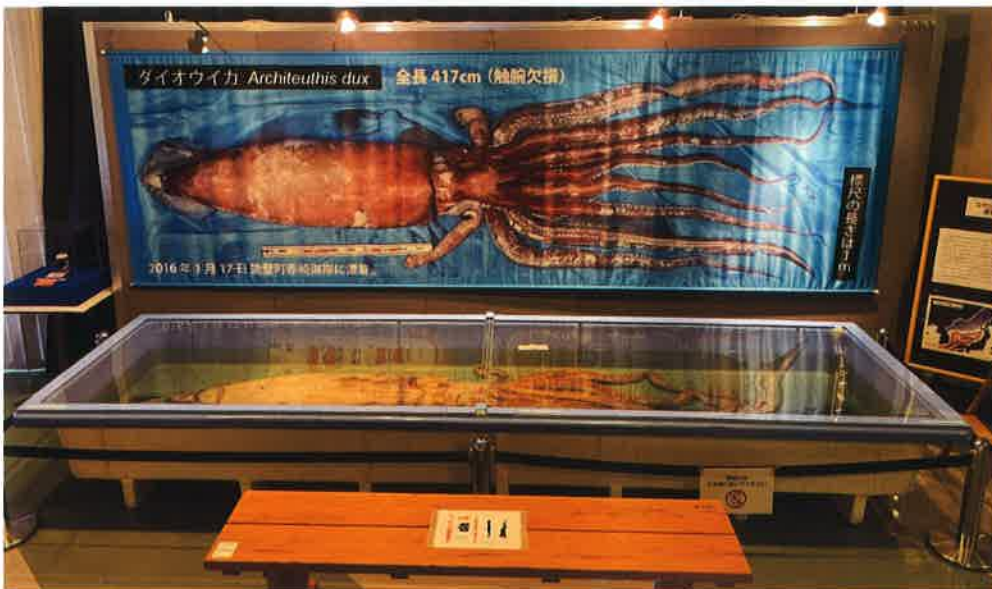


展示紹介

来場者多数！海の巨大生物展



2025年1月18日(土)～5月6日(火・祝)



海の巨大生物といえば、何を思い浮かべますか？この展示では、当館に収蔵されている標本資料を中心に、代表的な海の巨大生物を紹介しています。

【世界最大の二枚貝 オオシャコガイ】

殻の大きさは1m以上、重さは200kgにも達します。熱帯域のサンゴ礁に生息し、体内に共生する褐虫藻から栄養を得て、長い時間をかけて大きく成長します。乱獲や温暖化の影響で減少しており、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで「深刻な危機(CR)」のカテゴリーに選定されています。

【世界最大の節足動物 タカアシガニ】

細長い脚が特徴で、大きいものでは脚を広げると3m以上になります。系統的に古いカニなので「生きた化石」と呼ばれ、主に日本近海の深海に生息しています。食材としても利用されていますが、最近は漁獲量が減少しており、放流などの資源保護が行われています。

【世界最大の爬虫類 オサガメ】

体長は2m以上に達し、体重は600kgを超えます。背中がゴムのような皮膚で覆われているのが特徴で、クラゲを主な餌としています。ビニール袋などのゴミを誤飲して死んでしまうことがあるため、海洋汚染の影響が懸念されており、IUCNレッドリストで「危急(VU)」に選定されています。

【地球上で2番目に大きな動物 ナガスクジラ】

シロナガスクジラに次いで大きく、体長は最大で27mに達します。世界中の海に生息し、海水中のオキアミや魚を鯨ヒゲでこし取って大量に食べて大きく成長します。IUCNレッドリストで「危急(VU)」に選定。会場では1996年に輪島市に漂着した個体の骨格を展示しています。

【世界最大級の無脊椎動物 ダイオウイカ】

触腕を含めた全長はおおよそ15mにも達し、体重は250kgを超えますが、卵は1～2mmと意外に小さいことが知られています。動物界最大の目を持ち、深海で他のイカや魚・甲殻類をみつけて捕食し、大きく成長します。会場では2016年に能登町に漂着した個体の全身や卵の標本を展示しています。

他にも、イトマキエイやマンボウ・リュウグウノツカイなど、様々な巨大生物の標本資料を展示しています。また、巨大生物と並んで写真を撮れるフォトスポットを設置していますので、自由に写真を撮って展示を楽しみながら、それぞれの巨大生物の大きさを実感することができます。展示している標本には石川県近海で採集されたものも多いので、今回の展示をきっかけに、私たちにとって身近なふるさとの海にも巨大生物が生息しているということを知っていただけたら幸いです。

(学芸員 嶋田 敬介)

巨樹の世界

巨樹と言えば、皆さんは何を想像されますか？世界ではアメリカの国立公園に有るセコイア、日本では屋久島の「縄文杉」が有名ですね。最も巨大なセコイアは「シャーマン将軍の木」と呼ばれ、幹周35m、高さ83mにもなります。「縄文杉」は樹齢3千年といわれ、幹周16m、高さ22mの巨樹となっています。石川県は巨樹の宝庫といえます。吉野谷の「御仏供杉」(写真①)、白峰の「太田の大トチ」(写真②)、鳥越の「五十谷の大杉」(写真③)、市ノ瀬の「子持ちカツラ」など、巨樹の目白押しです。いずれの巨樹も傍に寄るだけで畏敬の思いになります。

実はそうした巨樹は人との交わりの中で、育っているものが大部分です。例えば、神社や仏閣周辺にある社叢林、社寺林あるいは公的施設等の地に多くの巨樹があります。それらは人の手によって守られ、敬意をもって接する対象になっています。

ただ、最近は状況が怪しくなっています。東京の神宮外苑の再開発問題は良く知られていますが、街中でも道路が通るからとか、宅地造成があるから等の理由で安易に樹木が伐採の憂き目にあう、ということもよく聞きます。しかし、伐採に至るまでには慎重に考慮を重ねることが必要です。

興味深い例として金沢市本多通りの歌劇座近辺の道路に出っ張っているモミの木(写真④)があります。私は30年前に初めて車で通りかかった時は、何て邪魔な木があるのだ、と思ったものですが、よくよく見るとこのモミの木の近くでは全ての車が減速して走行するようになっています。つまり、モミの木は交通事故を防ぎ交通安全に役立っているということになります。

巨樹・巨木の存在が人間の境地を超え、人間の生涯に比べ10～50倍以上の生命を保ち存在していることは驚異的で敬意を表するところと思っています。樹木は、多くの人たちに安心感を与え、快適な気持ちにさせ、また癒やしの効果が宿る要素を持っていることは間違いありません。

これからの時代においては「共生」が大きな課題です。金沢市等のように戦災にあってない、あるいは大火事にあつてない地域においては巨樹を含めて魅力ある樹木が多数見られます。それらを観光名所にする、という事は十分可能であり、これから更にアピールになると思います。足下を見て、さらに巨樹を大事にしていきましょう。

(前館長 竹上 勉)



行ってみよう！

- ① 御仏供杉
(白山市吉野谷)
- ② 太田の大トチ
(白山市白峰)
- ③ 五十谷の大杉
(白山市鳥越)
- ④ モミの木
(金沢市本多町)

特別展(写真展)

「巨樹の世界 ～石川県を中心として」

(2026年3月14日(土)～5月17日(日))

会場: 自然史資料館 企画展示室

手取川環境総合調査を終えて

2022年度から2024年度までの3年間、北國新聞創刊130年記念事業の一環として実施された「手取川環境総合調査」の調査団として調査を行ってきました。【樹木・植物】班に属して、「ダム建設後42年間の河畔植生の変化」「手取川中流域から下流域に分布する希少な植物種の現状」「手取川中流域の大群落地におけるナニワズの生育状況」「手取川の中流域の河川敷に生育するヒメアオキに対する大型草食獣による食害の現状」という4つのテーマに取り組みました。

2022年度の河畔植生の変化の調査では、手取川扇状地の扇頂部にある天狗壁川原(能美市)で種子植物相調査を行いました。月2回(6月～11月)の頻度の本調査および予備調査と補足調査を行って、調査範囲(3.89ha)内で植物採集や写真撮影をしました。本調査では、設定した調査ルート(1.61km)を踏襲し、297サンプルの標本を採集しました。天狗壁川原における過去の調査記録と比較することで、自然攪乱の減少や人為攪乱の増加が調査地に与えた影響を考察しました。この調査は、石川県立大学の澤田志乃さん(2022年当時4年生)の卒業研究テーマにもなっていたのですが、きっとこの1年間の植物相調査の経験は大きな糧となるでしょう。

2023年度は希少な植物種の現状調査を行いました。調査によって、河原特有の希少な植物種13種の生育を確認することができました。一方で、過去に記録があった生育地が消失したケースもありました。希少種が消失した生育地では消失要因の解明が必要です。適切な保護管理をしていたり、現状維持されている生育地についても、今後のモニタリングが重要です。

2024年度の調査では、手取川中流域でのナニワズ大群落やニホンジカなど大型草食獣によるヒメアオキの食害の現状を報告しました。ナニワズの希少な大群落地で毎木調査と個体の雌雄性を調べることによって、保全生態や繁殖戦略の研究に役立つ記録が得られました。日本全国でニホンジカの生息数の増加と生息域の拡大が問題になっている中、ヒメアオキへの食害を観察調査することで、ニホンジカの侵入初期段階を示す一つの指標を提示できたことは有意義な成果です。

3年間の調査を終えて、手取川流域の自然の貴重さを改めて感じました。これからも調査結果を生かすとともに、豊かな自然環境を引き継いでいくための調査研究を続けていきたいと思ひます。

(副館長 中野 真理子)

注釈:調査結果の一部は、2024年度開催の企画展「手取川の植物」(2024年7月20日～10月27日、後援:北國新聞社)で紹介しました。



ナニワズの毎木調査を行った雪残る早春の川原(2024年3月3日)



希少植物種を求めて探査した手取川中流域サツキが咲く岸壁。(2023年6月29日)



オオバキボウソクを採集(2022年7月14日)

学校・地域支援

最近のプログラムから

先日、生涯学習課主催の「がんばろう 能登っ子! 自然学校～冬山教室～」事業にお手伝いとして参加してまいりました。我々が担当したのは、「雪を体感!～雪の結晶づくり～」と「未来につなぐ～空飛ぶタネ～」というプログラムで、雪の結晶づくりは、初めてのプログラムでした。平松式ペットボトル人工雪発生装置を使い、雪の結晶づくりにチャレンジしました。結果は全員が雪の結晶を間近で観察することができました。子供たちの感想には、「こんなに簡単にできるとは」「できていく過程が神秘的」などが寄せられ、チャレンジの甲斐がありました。

また、新たな団体利用として、教育学部の大学生向けにプログラムを実施しました。桂学芸員による聞き耳講演会「地球と岩石・鉱物」、クイズラリー、おもしろ物理実験をセットにして行い、主に小学校教員を目指す大学生に向けて、自然の不思議さや面白さ、教員としての心構え

などをお話ししました。学生からは「楽しかった!」「理科が面白いと思えた!」との声をいただきました。

今後もニーズに合わせてプログラムを工夫し、講座の充実を図っていききたいと思います。

(駐在員 杉澤 寿治)



ペットボトルの中の雪

雪を満喫!



予告

企画展「歯ッ！」

会期：2025年6月14日(土)～10月5日(日)

歯は、脊椎動物の口腔内(口の中)や咽頭部(ノドの奥)にある、体内で最も硬い組織からできている部位です。アゴと一体化した消化器官の一つであり、主として咀嚼(食べ物を喰いちぎったり、噛み砕いたりすること)にかかわっています。また、獲物をつかまえたり、攻撃したり、身を守ったりするための武器としても働きます。時には、物をくわえて運ぶために使われることもあります。さらには、生殖行為の補助的な役目を果たすこともあります。

歯の形成や生えかわり方は様々で、動物の種類によって違いますし、同一個体の中でも異なることがあります。一生のうち一度も生えかわらないで伸び続ける歯もあれば、一回だけ生えかわる歯や、何度も生えかわる歯もあります。また、同一個体の歯列において、すべての歯の形がほとんど同じこともあれば、役割によって異なることもあります。さらに、歯の形や数は、成長

する過程で変わってきたり、オスとメスで異なったりすることもあります。

歯の形は、用途やエサとなる食べ物の種類と強く結びついています。それ故に、恐竜などの絶滅した化石動物について、食性を含む生態や成長に伴うそれらの変化などを推論するためには、歯はとても重要な手がかりとなります。

今回は、様々な種類の現生と化石動物の歯および頭骨の実物標本やレプリカ、模型を展示して、その多様性や機能などを紹介します。また、それらの形の美しさやおもしろさ、生物の進化の不思議さを感じていただきたいと思います。

展示場では、サメのアゴと一緒に写真を撮ることができるスポットの設置を計画しています。ぜひ当館までお越しください。

(学芸員 桂 嘉志浩)



現生のイタチザメのアゴ



瀬戸内海で採集されたナウマンゾウの臼歯

ミュージアムデイ

自然史講演会

チョットかじってみませんか？ 金鉱山と百万石

2025年5月17日(土) 14:00～16:00

展示：13:00～(当日のみ)

会場：自然史資料館 コミュニケーションホール

利用案内

- 開館時間：9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日：12月29日～1月3日

入館料：無料
駐車場：完備 (大型バス駐車可)

交通案内

【バスをご利用の場合】

金沢駅東口バスターミナル

- 『12 湯涌温泉ゆき』
『12 北陸大学薬学部ゆき』
『12 北陸大学太陽が丘ゆき』
→【銚子口】下車
→ 徒歩約10分
- 『95 北陸大学太陽が丘ゆき』
『95 北陸大学薬学部ゆき』
→【北陸大学太陽が丘】下車
→ 徒歩約10分

